



Title	ジョルジュ・サンドの小説作品における心の内奥と社会問題：『アントワヌ氏の罪』を例に
Author(s)	堤崎, 暁
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 103-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョルジュ・サンドの小説作品における心の内奥と社会問題 ——『アントワヌ氏の罪』を例に——

堤崎 暁

ジョルジュ・サンドは「確かな思考と感情の本質 *fond des pensées et des sentiments sérieux*、つまり心 *cœur* と呼ばれるもの¹⁾」に対する関心を抱き続け、「人物や事物の観察」に秀でていると自負し、芸術家としての自分の使命は「上手にせよ下手にせよ性格 *caractère* を描くこと、心の中 *intérieur* を描写すること」だと語る²⁾。このような自己認識を明示する彼女の小説を「心の物語 *histoire du cœur*」と称した Catherine Mariette-Clot は、サンドが試みるのは登場人物の心の内側を描き出すことだけでなく、その登場人物が世界をどのように知覚し、夢想するのかが示すことでもあると強調する³⁾。同氏も指摘する通り、このような特徴は特に、サンドの作品史研究において多くの場合「社会主義小説」という呼称で総括される 1840 年代の小説——『フランス巡歴職人』*Le Compagnon du tour de France* (1840)、『アンジボーの粉挽き』*Le Meunier d'Angibault* (1845)、『アントワヌ氏の罪』*Le Pêché de Monsieur Antoine* (1847)——に顕著であるように思われる。これらの小説においては、主人公たちが自身の恋愛や結婚を巡って熟考を重ねながら、様々な形で不平等が存在する社会と向き合い、より良い社会、そして自分自身の在り方を探究する姿が描かれる。いわゆる「社会問題」を取り扱うこの類の作品は、プロパガンダ的な作品とみなされ、「問題小説」という否定的なレッテルを貼られる危険性があるだろう⁴⁾。しかし、サンドは、小説の中で何らかの「観念 *idées*」を「出来事 *faits*」に混ぜることは「物語作者の権利であり義務でさえある⁵⁾」と語り、読者は何よりもまず作家の「思考に入り込むこと⁶⁾」を望むと考える。彼女にとって、自身の主観的な見解を作品に盛り込むことは必然の行

1) George Sand, lettre à Charles Duvernet [29 octobre 1834], *Correspondance*, éd. Georges Lubin, Paris, Garnier, t. II, 1966, p. 726.

2) George Sand, *Histoire de ma vie*, dans *Œuvres autobiographiques*, texte établi, présenté et annoté par Georges Lubin, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1970, p. 672.

3) Catherine Mariette-Clot, « “L’histoire du cœur” dans les romans des années 1840 : réalisme ou utopie ? », dans Brigitte Diaz et Isabelle Hoog Naginski (dir.), *George Sand, pratiques et imaginaires de l’écriture*, Caen, Presses universitaires de Caen, 2006, p. 277-283.

4) Suleiman は、一般的な使われ方において「問題小説」という呼称は作品の芸術的価値を否定する不名誉なレッテルであることを指摘し、その例として、ポール・ブールジェがサンドの小説とユゴーの『レ・ミゼラブル』について、忠実さを欠いた現実を描く「問題小説」であると非難していることを挙げる (Susan Rubin Suleiman, *Le Roman à thèse ou l'autorité fictive*, Paris, PUF, 1983, p. 8-9)。

5) George Sand, lettre à Anténor Joly [13 août 1845], *Correspondance*, op. cit., t. VII, 1970, p. 55.

6) George Sand, lettre à Gustave Flaubert [12 janvier 1876], *Tu aimes trop la littérature, elle te tuera : Correspondance*, nouvelle édition de Danielle Bahiaoui, Paris, Le Passeur, 2021, p. 608.

為であり、とりわけ「人間の心の動き *les mouvements du cœur humain*」を描写する場合には客観性は排除されるべきものとなる⁷⁾。つまり彼女は、小説の中で社会の現実を忠実に描き出すのではなく、作家の主観を交えた小説世界における登場人物の心理描写を通じて、人間の心の内にある「機微 *nuance*」、「物事の本質 *fond des choses*」を表現することにこそ力を注ぐのである⁸⁾。本稿が取り組むのは、このようなサンドの芸術観を把握するという試みの一端であり、社会や生活環境の変化に直面した人物の「心の動き」が顕著に描かれた作品の一つと言える『アントワヌ氏の罪⁹⁾』を取り上げ、様々な出来事によって主人公の心の中に生じる葛藤や苦悩に着目して分析を行う。

まず、本論に入る前に『アントワヌ氏の罪』のあらすじを簡単に確認する。物語は、パリから来た主人公エミールがフランス中部の地方を訪れる場面から始まる。この地で父親カルドネ氏が開業した工場を訪ねてきた彼は、没落貴族のアントワヌ氏とその娘ジルベルト、莫大な財産を持ちながらも人との関わりを絶って暮らすボワギルボー侯爵、かつては大工として働いていた浮浪者ジャンなどと知り合う。そして、両親の住まいと工場があるガルジレス、アントワヌ氏たちの住むシャトープラン、侯爵の領地であるボワギルボーを行き来しながら地元の人々との親交を深めたエミールはジルベルトとの結婚を望むようになる。事業の成功を何よりも望むカルドネ氏は、息子を貧しい没落貴族の娘と結婚させることに強く反対するが、最後には、ボワギルボー侯爵が自身の財産の後継者にエミールとジルベルトを指名したことで結婚が実現する。1845年に雑誌上で発表され、1847年に書籍出版された本作は、19世紀前半のフランスの地方における産業化を背景としており、「計算とエゴイズムの時代 (99)」に起こる社会の変容の現場に直面した青年の恋の物語と言えるだろう¹⁰⁾。

1. 産業化と親子の対立

本作は、主人公エミールの恋の物語であると同時に、父親との対立の物語でもあると言える。なぜなら、この対立がエミールの心に葛藤や苦悩を生み出す最大の要因となるからである。物語冒頭、シャトープランで父の評判を探るエミール

7) *Ibid.*, p. 609-610.

8) 1875年12月、サンドはフロベールに宛てた手紙の中で、彼の「流派 *école*」、すなわち写実主義作家に対する見解を述べている。- 「人間は善か悪かではありません。善であり悪なのです。しかし、まだ何かがあります。それは、私にとっては芸術の目的である機微です。善であり悪でありながら、人間は心の内の力を持っていて、その力が、非常に悪くてほとんど善くない人間にしたり、非常に善くてほとんど悪くない人間にしたりするのです。あなたの流派は物事の本質は気にかけず、表面に気を取られすぎているように私には思われます」(George Sand, *lettre à Gustave Flaubert* [18 et 19 décembre 1875], *ibid.*, p. 598.)

9) 『アントワヌ氏の罪』からの引用に際しては次の版のテキストに従い、各引用後の括弧内にページ数を記す。なお、引用にはすべて拙訳を用いており、引用中の下線は筆者によるものである。George Sand, *Le Pêché de Monsieur Antoine*, éd. Jean Courrier et Jean-Hervé Donnard, Meylan, Éditions de l'Aurore, 1982.

10) Bernard Hamon は、本作の中心的な特質は「産業化とその明白な結果である人間による人間の搾取に関する批評」であると指摘する (Bernard Hamon, *George Sand et la politique : « Cette vilaine chose... »*, Paris, L'Harmattan, 2001, p. 190)。

に対して、アントワヌ氏は、カルドネ氏が「産業的活動の恩恵を地域にもたらしたことに感謝すべき (58)」だと語る。さらに、カルドネ氏の工場を「発明」と称する小姓のシルヴァンは、工場の周りに作られた道や橋を褒め、工場での雇用形態にも肯定的な意見を示す。

－「[...] カルドネ氏は出し惜しみはしません。彼は少し厳しく話し、労働者を少し疲労困憊させます。それでも！彼は給料を支払っていて、それは見事なものです！くたくたになるまで苦勞して働いた時、しっかり報酬がもらえれば人は満足するに違いない、そうではありませんか？」

青年「エミール」はため息を抑えた。彼は、シルヴァン・シャラッソン氏の経済的補償のシステムを完全には共有していなかった。そして彼は、どれほど父親の行動を是認したいと思ったとしても、給与が健康と生命の喪失の代わりになりうるということを明確に想像することはできなかった (69)。

このように、カルドネ氏の事業によってガルジレスに起こった変化は、工場で働いてはいない地元の人々の目には利点があると映っているが、パリから来たエミールの心には父の行動に対する疑念を生じさせる。また、引用下線部で示される、父の事業を認めたい気持ちとは裏腹に疑念を抱いてしまうというエミールの感情は、カルドネ一家の関係を象徴しているように思われる。

自分を傷つける教えに子供が反抗するのは自然の理である。エミールもまた、早い時期から、父が自分に与えようとする推進力とは全く反対の推進力を外的事実から受け取ってきた。

この自然で不可避の対立の結果は、この物語の出来事によって十分に展開されるだろうが、それをここで説明する必要はない (74)。

夫に服従する母を見て育ってきたエミールにとって、母と同様に父に服従することが「本能的な習慣 (73)」となっていたのだが、彼の中では、専制的な父親の教えに対する反骨心が確実に燃っていたと言える。父親の事業についてエミールが密かに抱いた疑念は、高給と引き換えに被雇用者の心身を消耗させるとする諸刃の剣となりかねない地方の産業化の実態を暗示すると同時に、物語の本筋となる親子間の「自然で不可避の対立」が顕現する予兆となるのである。

父親の行動に対するエミールの反発は、土地で唯一カルドネ氏の事業を公然と非難し続けるジャンとの対話の中で一層明確になっていくこととなる。ジャンは、カルドネ氏は現在は大金を払って人々を雇っているが、近いうちに工員を低賃金で働かせて不幸にするだろうと予想する。エミールはこの予想を完全には受け入れられないものの、確実に以前より強くなった父に対する疑念ゆえに「痛切な物憂さ *profond ennui* (157)」に苛まれる。しかし、その憂鬱はジルベルトの存在によってかき消され、工員たちへの哀れみも彼の頭からは抜け落ちることになる。そし

て、ジルベルトへの想いを強め、ボワギルボー氏との親交を深めるにつれて、次第に「エミールの精神 *esprit* はより頻繁にボワギルボーに、心 *cœur* はほとんど常にシャトープランに (193)」向かうようになる。とはいえ、工場に関する問題は完全に忘れ去られたわけではなく、工員たちの様子を目の当たりにした時、エミールは強い憐憫の情を抱く。

無気力な工員たちには体力が不足していて、最も精神的な人たちの競争は、彼らに対抗心ではなく落胆をもたらしていた。仕事はしっかり給料を支払われてきていた。しかし働き手たちは、主人の不満を聞いて、自分たちが長い間雇い続けてはもらえないと思っていたので、現在可能な限りの利益を確保することを望み、食事の面で節約をしていた。彼らが、ピラミッド建設のために雇われたヘブライ人奴隷たちのように、湿った石の上に座り、泥の中に足を入れて一欠片の黒パンと生の玉ねぎを食べているのを見た時、エミールは強い哀れみにとらわれるのを感じ、労働と節制によるこの緩慢な死に彼らを見捨てるぐらいなら、彼らに自分自身の血を与えて飲ませたいと思ったほどだった (244)。

カルドネ氏の工場は、そこで働く大半の人々にとって、労働量に応じた賃金を受け取れる場ではあっても、長期的に働ける場でもなければ、労働への活力が湧く場でもない。また、この工場内で働く人々に固有の名前は与えられず、彼らの感情や家庭環境が明示されることはないが、奴隷のように働く彼らに向けられるエミールの哀れみの感情が、地方の人々を過重労働と没個性へと導く「田舎のプロレタリア化¹¹⁾」の実態を読者に示唆するのである¹²⁾。そして、その現場に直面したエミールは、工員の負担を軽くしてもっと良い食事を与えるよう父を説得しようとするものの取えなく失敗に終わる。当時の社会を象徴する要素の一つである産業化に関する意見の齟齬を契機に親子間の対立は表面化したとしても、やはりエミールにとって父は、服従することを強いられた「恐ろしい主人 (220)」のまま

11) 本作に見られる地方の産業化について、Aurore 版の編者は次のように指摘する。－「産業の到来は間違いなく農民たちを惹きつけるもので、カルドネ氏は短期の約束で容易に彼らを魅惑するだろう。この小説は、奴隷のような大衆の無個性を免れることなく、畑や製作所ではなく農場や工場で二倍の労働時間を実行する賃金労働者と共に田舎のプロレタリア化 *prolétarisation rustique* をありのままに捉える」(Jean Courrier et Jean-Hervé Donnard, «Présentation», *Le Pêché de Monsieur Antoine*, *op. cit.*, p. 20.)

12) サンドが持つ民衆の過重労働に関する問題意識は、後に『共和国広報』に掲載された記事において、より明確に示される。－「民衆は苦しんだ。家族を養い、保護し、衣服をあてがひ、教育するという自らの力を超える務めを男性は十分遂行できなかった。この務めは、家族が多い時、その全てを社会が個人に負わせたままにする時、労働者にはあまりに重いものである。休息のない労働で衰弱した老人、十分な仕事を奪われた妻、時期尚早の労働の犠牲になった子供を、共和政の社会が効果的に助けに来ることは絶対に必要である。家族の父が過度の労働によって押し潰されることがないようにするには、これしかない。給料の問題は一時凌ぎの手段でしかない。労働者の生死の問題は、もっと広がっていて、複数の性質の援助を求めている」(George Sand, «Ministère de l'intérieur» (*Bulletin de la République*, n° 12 [6 avril 1848]), dans *Politique et Polémiques : 1843-1850*, «Présentation» de Michelle Perrot, Paris, Belin, 2004, p. 392.)

なのである。

2. 目指すべき社会と二人の父親

事業の方針を巡って起こったカルドネ親子の対立は、より広い観点、つまり社会全体に関わる問題においても展開される。カルドネ氏が、法律を学んでいたはずの息子が見せる「人道主義的な新しい流派の仰々しい演説、空いばり (144)」を拒絶する一方で、エミールは、かつて父に対して「全てにおいて服従する掟を自らに課した (145)」が、そもそも法律を学ぼう仕向けられたことに不満を抱いていたことを明かす。農業を学び、「自由な人々、兄弟として生き、一人の兄弟として自分を愛する人々の集団」を作ることこそが、彼が本来抱いていた「野心、運命と栄光への渴望 (146)」だったのである。しかしカルドネ氏は、その夢を追えば時間と金を無駄にするだろうと応じて退ける。

—「[...] お前は、私が別のところで集めるものを無分別に浪費することだろう。そして 40 歳になり、空想力を汲み尽くし、才能と信頼も尽き、自分の弟子の馬鹿さ加減や背徳にうんざりして、おそらく気が狂うだろう。なぜなら、繊細で夢見がちな魂は自分の夢を適用しようとした時にこうして終わっていくからだ (146)」

エミールの中に「繊細な魂 *les âmes sensibles*」を見るカルドネ氏は、Thomas Pavel が「繊細な心」と呼んだ小説中の登場人物の行く末に近いものを、息子の将来に重ねるのである¹³⁾。こうして息子の夢を容赦無く否定した彼は、ユートピアを構想するよりも自分に従って事業を手伝うよう求める。そして、父が語る「産業の理想 (147)」に反発するエミールに対して、さらにカルドネ氏は、功績に見合った報酬を支払うべきとする「各人の能力に応じて各人に (147)」というサン＝シモン主義の標語を援用しながら説明を加える。

—「[...] 時代の動きの全てが産業に向いている。さあ、産業が君臨し、圧倒的にならんことを。腕を使う人も、頭を使う人も、全ての人が働かんことを。他の人々を指揮するのは腕を使う人よりも頭を使う人だ。その人は財産を築く権利と義務を持つ。[...] あらゆる方法によって、能力のある人間の権力を強固にすることに向かって社会が協力せんことを！ (147)」

13) 「小説は個人を、強い魂 *âmes fortes*、繊細な心 *cœurs sensibles*、謎に満ちた精神 *psychés énigmatiques* という三つの形式で表現する。[...] リチャードソンの作品におけるパミラやクラリッサ、同様に、『新しいエロイズ』としてルソーが示すジュリーが繊細な心を体現する。内省の傾向にあるこれらの人物は、自分の感情をよく理解し、時には大きな犠牲と引き換えに道徳的理想と一致した行動をとることを熱望する。ルネサンス期や 17 世紀の中編小説、18 世紀の小説、そしてしばしば 19 世紀の小説の登場人物たちがそのように振る舞う」(Thomas Pavel, *La Pensée du roman* [2003], nouvelle édition revue et refondue, Paris, Gallimard, 2014, p. 47.)

カルドネ氏の発言は当時の社会における産業の発達や実業家の見解を具現していると言えるが、エミールには、父の考えは自分が夢想するものより「恐ろしいユートピア (148)」のように思われ、父が援用した標語を補足して再び自らの理想を語る。

－「[...] その標語は偽りです。なぜならそれは不完全なのだから。そこに『各人の欲求に従って各人に』という文言を付け加えない限り、それは不当で、知性と意志によって最も強い人の権利であり、違った形での貴族制や特権です。ああ、お父さん、強者と一緒に弱者に対して戦うのではなく、弱者と一緒に強者に対して戦いましょう (149)」

カルドネ氏が、知的な能力に秀でた人間が富と権力を得ることこそ社会の目標であると考える一方で、エミールは弱者の利益を図るために連帯した社会を目指すべきだと強調する。後者が示すこのような理想は、農民や労働者などの社会的地位の低い人々に同情を寄せ続けたサンドの考えとも一致しているように思われる¹⁴⁾。一方で、「各人は各人のために (198)」という信条を持つが故に他者の不幸を考慮しないほどの強い利己主義を示すカルドネ氏は、サンドが描く成り上がり者の一つの類型であり、七月王政下の産業発展における負の側面を強調する存在となる¹⁵⁾。カルドネ氏が産業本位の個人主義的な近代社会の体现者であるとすれば、エミールは社会主義的あるいは共産主義的な理想を追求する作家の代弁者であると言えるだろう。そして、互いに譲歩することなく続く二人の議論は「対立 La lutte」と題された第13章全体を通じて続くが、決着がつくことはない。一見するとこの章は、小説の中での社会思想に関する議論の乱用とも捉えられかねないが、小説を「論説 traité」と区別するサンドは、本作の中で描いた議論について悪びれることなく正当性を認めている¹⁶⁾。つまり、社会の現在と未来に関する上述

14) サンド自身、作中で示した二つの標語について、「小説の読者が大きな注意を払うことはないが全ての人にとって世界の未来を含む二つの標語」と評して説明を加えている。－「サン＝シモン主義者が言う『各人の能力に応じて各人に』、共産主義者が言う『各人の欲求に応じて各人に』、これら二つの切り離された標語は等しく誤っています。これらは真に結合されるものです」(George Sand, lettre à Anténor Joly [14 ou 15 octobre 1845], *Correspondance*, op. cit., t. VII, p. 127.)

15) 『アンジボーの粉挽き』においては、金銭欲の強い成り上がり百姓のブリコラン氏が「各人は各人のために」という潮流を強調する (George Sand, *Le Meunier d'Angibault*, éd. Béatrice Didier, Paris, Librairie Générale Française, «Le Livre de Poche», 1985, p. 382)。また、サンドは『共和国広報』において地方の農村に住む人々に対して個人主義的な動向への警戒を呼びかけている。－「農村に住んでいる人々よ、あなた方の真の利益を知り、エゴイズムと恐れから出る有害な提案を拒みなさい。社会の真理を理解することに慣れなさい。社会の真理とは、各人が皆の利益を考慮することなくひたすら自分自身の利益のことを考える時は破滅に向かっていくのだということだ。永久に倒壊したばかりの政府は、『各人は各人のために』という教えを説き勧めていた。この教えがあなた方をどこに導いたかをあなた方ははっきり見た。今日、あなた方を苦しめる害悪は相変わらずこの教えによる産物なのだ」(George Sand, «Ministère de l'intérieur» (*Bulletin de la République*, n° 7 [25 mars 1848]), dans *Politique et Polémiques*, op. cit., p. 375.)

16) 「小説は論説ではありません。[...] すぐに実行に移されるために一つの教義を書くこと、あるいは、今日のような人類に関して自分の信仰の最新の言葉を与えることが問題となる場合、

の議論は、何らかの実践可能な具体的理論を喧伝するために描かれたものではなく、本作の物語を展開させる装置として、カルドネ親子の対立を際立たせ、後にエミールとジルベルトの結婚の可否を左右する最大の争点を生み出すのである。

「完全に理想を欠いた魂」に由来する「鉄のような性格 (150)」を持つ父親と、「繊細で夢見がちな魂」を持つ息子、実の親子同士の対立が解消不可能なものとして続く一方で、エミールとボワギルボー侯爵は互いに対する共感を深めていく。自分たちは二人とも「共産主義者 *communistes* (186)」だと称し、青年の言うことを切り捨てることなく落ち着いて論ずる侯爵に対して、エミールは「子としての忠誠 (189)」を誓うのだ。そして、彼らもまた社会と人類の未来に関する互いの信条を語り合うが、二人の間に対立は生じ得ず、ボワギルボーという土地はエミールにとって、実父のいるガルジレスよりも居心地の良い場所となり、彼はそこで「今までにない精神生活 *un intérieur nouveau* (200)」を作り出す。つまり、彼はカルドネ氏が唾棄した自分の夢について語り合い、その夢を正しい方向に導いてくれる同志がいる環境を手に入れたと言えるだろう。そして、このことを象徴するかのように、侯爵が「穏やかな唱導者」として「社会問題に対するエミールの怒りっぽい熱意を落ち着けるのに貢献した (199)」一方で、カルドネ氏は依然として自分の思う通りに息子を制御することを望む。エミールは、父が要求する「自分自身の放棄 (284)」に強く反発するが、カルドネ氏はさらに「一生の服従 (285)」を息子に求めるのである。こうして、カルドネ氏が「もう一人の自分自身 *un autre moi-même* (285)」として事業を手伝うようエミールに求めるのに対して、侯爵もまた、異なる形でエミールを「もう一人の自分自身」と捉えている。

エミールが農業に対して示す関心と知性は、気高く高潔な性向を特徴づけているとボワギルボー氏には思われ、自分がエミールのような息子を持つという幸福を得られたならば、自分が生きているうちに莫大な財産を利用できたのと思っていた。彼はその財産を貧者のために使おうと決めていたが、今はその使い道が分からなかった。息子の中、友人の中、もう一人の自分自身の中に、充実した主体性と自分の人生の所産を真剣に全うする方法を見つげられた時に人は神に加護されると、ため息まじりに言うことを慎むことは彼にはできなかった (216)。

「精神と性格の中に主体性 *initiative dans l'esprit et le caractère* (191)」を持っていないと自ら語る侯爵は、若くて「活力 *activité* と意志 *volonté* (130)」を備えたエミールの中に「充実した主体性 *une initiative féconde*」を見出し、領地や金などの物質的な財産だけでなく、「自分の人生の所産 *l'œuvre de sa destinée*」、つまり、社会の改善のために長らく独りで書物を読み漁り、熟考してきた成果という精神的な財産をも託すことを望む。カルドネ氏とボワギルボー侯爵、どちらも目指す

私はもっと慎重に、そしてより明快に自分の意見を示したことでしょう」(George Sand, lettre à Jean Dessoliers [2 novembre 1848], *Correspondance, op. cit.*, t. VIII, 1971, p. 685.)

べき社会についてエミールと議論をしながらも、実の父親が息子の夢を砕き、一貫して自分の意志のみに従って息子を導こうとするのに対し、エミールの「精神的な父親¹⁷⁾」とも言えるボワギルボー侯爵は、エミールの意志を尊重しつつ、自身自身の夢とも言える彼の夢を後押しする助言者となるのである。

3. 不屈の愛の力

ここまで見てきたことから、産業の発達の現場との直面や社会の未来に関する議論は、これまでは服従してきた父に対する反抗の糸口となったり、新たな父のようでもある侯爵との親交の深まりによって思想に落ち着きと深みを与えたりするという形で、エミールの内面に大きな変化を及ぼしたことが分かる。つまり、新たな環境に身を投じて社会の未知の一面に触れたことで、それまでエミールが見てきた社会や自分を取り巻く環境といった広い世界との関わりの中で彼が知覚し考えてきたことに変化が生じたと言えるだろう。しかし、エミールの心の中に起きたもう一つの、そして最大の変化は、より狭い領域、ただ一人の他者との関係の中で生じた。それがジルベルトへの愛であり、父親との対立より、社会に関する夢想より、何よりも強くエミールの心を揺さぶるのだ。

全てが調和する社会において、愛は間違いなく愛国心や社会的献身への刺激剤となるだろう。しかし、大胆で高潔な意志が、我々を取り囲む人々や物事との辛い争いを強いられた時、個人的な愛情が我々を捉え、他の能力を麻痺させてしまうほどに我々を支配するものだ。[...] この哀れな子供に対して過度の不名誉を与えることはせずに、彼がもはや、法律、現実、未来、世界の過去、社会の悪徳、その悪徳の埋め合わせをする方法、人類の貧困、神の意志、天国、地上について考えてはいないと認めよう (194-195)。

作中では、「愛 amour」という感情一般についてしばしば語り手による解釈が提示される。「大胆で高潔な意志 intentions hardies et généreuses」を持つエミールは、父との関係、工場の運営方針、さらには社会と人類の未来について葛藤や苦悩を繰り返す中で、「個人的な愛情 affections personnelles」であるジルベルトへの愛に支配され、徐々に彼女のことしか考えられなくなるのである。しかし、「あなたへの愛で死にそうだ (227)」と言って熱狂的に愛を伝えるエミールに対して、ジルベルトは、自分は貧しく、カルドネ氏は財産を増やすことだけを考えていることを理由に結婚には消極的な態度を示す。そして、娘に対するエミールの気持ちを知ったアントワヌ氏もまた、家名しか持たないジルベルトとの結婚をカルドネ

17) Anna Szabó は、サンドの作品中にしばしば登場する、教育者としての役割を果たす「精神的な父親 pères spirituels」の一例としてボワギルボー侯爵を挙げる (Anna Szabó, «La paternité chez George Sand», *Les Amis de George Sand*, n° 19, 1997, p. 23)。また、高岡尚子は「エミールはボワギルボー氏の中に精神的、哲学的父性を見出している」と指摘する (Naoko Takaoka, «Les jardins dans *Le Pêché de Monsieur Antoine* de George Sand», *Études de langue et littérature française*, n° 80, 2002, p. 48)。

氏は認めないだろうということ、さらに、「私たちが生きている時代において、愛は夢幻 *songe* で結婚は取引 *affaire* (272)」でしかないということを理由に諦めようとする。しかし、愛の力、そして対立してもなお父親のことを信じているエミールはアントワヌ氏に主張する。

—「あなたは私のことを分かっていません」エミールは叫んだ。「社交界の掟や利益がらみの計略を私が受け入れると、私がそれを望んでいると思っているのだとしたら！ [...] なぜなら私は、不屈の愛の力の全てを自分の中に感じているからです。私の情熱の力と同じ力を父が認めた時、この上なく賢明で聡明な父、この世の何よりも、もちろん野心や財産よりも私を愛している父は、下心なしに私の婚約者に腕と心を開くでしょう (272)」

「不屈の愛の力 *forces d'un amour invincible*」を信じるエミールのこの宣言は、結婚を単なる家同士の「取引」と考える前時代的な旧弊から脱却し、新たな時代へ身を投じようとする青年の宣言であり、サンドがこの小説で示そうとした「観念」、すなわち時代の推移とそれによる規範の変化を表しているとも言えるだろう¹⁸⁾。そして、このエミールの毅然とした態度を受けて、ジルベルトもまた彼を愛しているとアントワヌ氏に打ち明けるが、一方でカルドネ氏は結婚を許す代わりに一生自分に服従するという条件を息子に突きつける。つまり、エミールが農業を基本とした理想的な共同体を作るという野心を捨て、一心不乱に事業を手伝え一年後には結婚に同意すると提案するのである。そして、この冷酷な提案によって「深く傷つき、悲しみに暮れた *profondément blessé et navré* (286)」エミールを特に苦しめるのは、例え自分の信条を捨てて父に従ったとしても、その行為によってジルベルトに軽蔑されてしまうという懸念である。

エミールは自分の寝室に行き閉じこもり、最も激しい不安に囚われながらそこで二時間過ごした。対立や争いを起こすことなく、その時まで彼が恐怖と悲しみと共に予想してきた、父の心を傷つけるというあの恐ろしい試練を通ることなくジルベルトと結婚するという考えが、彼を完全な恍惚に投げ込んでいた。しかし突然、不道德な誓いによって自覚しながら自分の品位を落とすという考えが、彼を辛い絶望に陥れていた。そして、この喜びと苦みの交互継起の中で、彼は何も決心できずにいた (287)。

父への敬意、社会に関する理想、自身の信条の放棄に対する嫌悪感、そして何よりジルベルトへの愛、これらの感情が心の中で渦巻き、エミールは解決不能のジ

18) サンドは本作の題名の選定に言及した手紙の中で、小説の「出来事 *fait*」よりも「観念 *idée*」を端的に表す題名の候補として「古いものと新しいもの」*Le vieux et le neuf*、『昨日と明日』*Hier et demain*、『失脚した人々と成り上がった人々』*Déchus et parvenus*、『老人たちと若者たち』*Les vieux et les jeunes* を挙げている (George Sand, lettre à Anténor Joly [13 août 1845], *Correspondance*, op. cit., t. VII, p. 52)。

レンマに陥るのである。そして、こうした状況の中で、ジルベルトに全てを打ち明けるべきか否か悩みながらも結局は何も決断できないエミールは、とうとう父に対する愛や敬意を失ってしまったとボワギルボー侯爵に告白することとなる。

－「[...] 数時間前から、私は父をもう愛しておらず、父を深く悲しめることをもう恐れておらず、私の中にはもはや彼に対する敬意も尊敬もないように私には思われるのです。おお、神よ、私の力を超えたこの苦しみから私を守ってください！ [...] 今日、血のつながりが永久に絶たれたように私には思え、私を虐げ、敵や幽霊のように私の魂を苦しめる未知の主人に対して戦っているように思えます！（290-291）」

事業の方針や社会問題を巡って表面化した父との対立は、血縁関係の喪失を感じさせるほどの苦しみをエミールにもたらす域にまで達するのである。

エミールは、父の要求に従ってこれまで自分が育んできた「人類の未来に対する信条を捨てた場合（294）」のことを尋ねるが、これに対してジルベルトは強い意志を持って、「あなたがあなた自身であることをやめたら、私はもうあなたを愛さないでしょう（295）」と答える。カルドネ氏を驚かせるほどの「自制心を持つ（284）」彼女は、エミールとは対照的な芯の強さを示し、結婚のために「長い間大いに戦う決心をする（296）」勇気を持つよう彼を励ますのである。それでもなお、躊躇する気持ちはエミールの心の中に断続的に生じるが、「ジルベルトが偉大で自分の愛に相応しい姿を示せば示すほど、この愛は不屈の強さを彼に感じさせていた（297）」つまり、息子を思い通りに操ることができると信じていたカルドネ氏だが、実際のところ彼は息子の心の内を把握できてはいなかったのだ。

カルドネ氏は人間の心を知っていると思っていた。なぜなら彼は人間の弱さの秘密を知っていたからだ。しかし彼は、物事や人間の弱く悲惨な側面しか知らず、真理の半分しか知らなかった。「私はもっと重要な機会にエミールを従わせてきた。仮初の恋など些細なことだ」と彼は思っていた。仮初の恋の場合であれば彼は正しかった。その場合においては彼は身の程を知ることができた。しかし、彼にとって大いなる愛は理解できない理想であり、崇高あるいは不吉な決意を抱かせることがありうることを彼は全く予想していなかったのだ（199）。

エミールは、優柔不断な態度を示しながらも、ジルベルトや侯爵の励ましを受けて「大いなる愛 *grand amour*」、アントワヌ氏の前で宣言した「不屈の愛の力」を信じ続けた。一方で、頑固なカルドネ氏は、自分が息子の心、ひいては「人間の心 *cœur humain*」を見誤っていたことを認めることはなく、ついにはエミールの気を紛らせるためにイタリアへ送ろうと企てるが、エミールとジルベルトに自分の財産を相続させる代わりに二人の結婚を認めるよう侯爵が提案する。エミール

ルが自身の葛藤に踏ん切りをつけられないまま、侯爵が提案したこの「調整の手段 (365)」が結婚を実現させ、カルドネ親子の対立に終止符を打つのである。

エミールは父親に服従することをやめ、「不屈の愛の力」によって前時代の慣習から脱却する意志を示し、社会の未来に関する信条を持ち続けたものの、自力では何も解決することができなかった。結果としてエミールが財産を手に入れたことでカルドネ氏が譲歩したということから、この結婚は、アントワヌ氏が言うこの時代特有の「取引」としての結婚であるとも言えるだろう。しかし、作家はこの結婚が簡単に「取引」に成り下がることを巧みに避ける。なぜなら、それはエミールとジルベルトが理想の共同体を実現するであろう未来を前提とした結婚だからである。物語の結末において、侯爵はエミールたちに語りかける。

「[...] 私の計画が成熟するのを目にするのは、おそらくあなた方ではなく、あなた方の子供達でしょう。しかし、あなた方に私の財産を遺贈しながら、私は自分の魂と信条をあなた方に遺贈します。有益に基礎を築くことをあなた方に許さない人類の局面を通るのであれば、あなた方はそれを他の人に遺贈するでしょう。[...] (373)」

侯爵は自分の成し得なかった計画をエミールに託すが、そこで受け継がれるのは具体的な理論ではない。それは侯爵の「魂 *âme* と信条 *foi*」であり、例えエミールが生きる時代には果たされなかったとしても、その計画が実現されるまで次の世代に脈々と受け継がれていくことを望むものである。そして、いつの日にか実現されるであろう全てが調和した社会においては、愛はエミールが自力で抜け出すことのできなかったジレンマに陥ることはなく、「爱国心や社会的献身への刺激剤 (194)」となり得るのだ。未来への希望に満ちたこの結末は、人類は時代を経て完成に向かうという進歩史観に裏打ちされた理想的あるいは楽観的な結末と言えるが、同時に、実際に未来に存在しうる現実に向かうための始まりとも捉えることができる。この意味で、サンドの文学は Isabelle Hoog Naginski が提唱する「預言的写実主義」を体現していると言えるだろう¹⁹⁾。また、フロベールに対して、彼が「悲嘆 *désolation*」を生み出す一方で自分は「慰め *consolation*」を生み出すと語るサンドは、自分の作品を読む読者の不幸を減じることを望む²⁰⁾。ジルベルトへの愛と理想を追求する信条、どちらも捨てられなかったエミールは、結果的に両方を維持したまま結婚するに至ったが、他人からの財産贈与という非現実的とも言える解決策によって実現する結婚は、現在の社会におけるエミールの理想の維持と実現の難しさを物語ると同時に、その理想が具現する未来が訪れ得るとい

19) Naginski は、サンドの文学を「未だ目に見えないが実現されつつある現実を先取りする」文学として捉え、「預言的写実主義 *réalisme prophétique*」と呼ぶ。この点については以下を参照。Isabelle Hoog Naginski, «George Sand et le réalisme prophétique», dans Éric Bordas (dir.), *George Sand : écritures et représentations*, Paris, Eurédit, 2004, p. 45-66.

20) George Sand, lettre à Gustave Flaubert [18 et 19 décembre 1875], *Tu aimes trop la littérature, elle te tuera*, op. cit., p. 597.

う「慰め」をエミールと読者に提供するのだ²¹⁾。

『アントワヌ氏の罪』においては、地方に訪れた産業化の波という時代の趨勢が物語の背景となる。しかし、サンドが専心するのはこの社会の現実を仔細に描写することではなく、その世界で生きる主人公エミールが抱く疑念や哀れみ、葛藤を描くことである。これらの描写を通して、産業化の負の側面が間接的に炙り出されるのだ。そして、このように示された現実はまだ、カルドネ親子の対立を深める要因となり、「大いなる愛 (199)」とユートピア的な共同体の設立という二つの理想による板挟みへとエミールを導く。つまり、本作においては、社会の現実はその自体が引き起こすエミールの「心の動き」を介して改めて提示され、それが再びエミールの心を揺さぶるというように、社会問題と心の内奥が絶えず相互に作用して描き出されていると言える。サンドはこの相互作用を通して、登場人物の感傷的な心の描写、あるいは客観的な事物の描写、どちらか一方に偏ることを避けながら、動乱が続く19世紀のフランス社会を真に生き、尚且つ未来を見据える一個人の心の奥深くにある「機微」を描き出し、自身の小説を「人間味のある *humain*²²⁾」ものにすることを目指すのである。

(大阪大学博士後期課程在学中)

21) サンドのユートピア小説と「慰め」の概念については以下を参照。Isabelle Hoog Naginski, *George Sand : L'Écriture ou la vie*, Paris, Honoré Champion, 1999, ch. VII, «De la “désolation” à la “consolation” l'utopie au secours d'un enfant du siècle», p. 197-219.

22) George Sand, lettre à Gustave Flaubert [12 janvier 1876], *Tu aimes trop la littérature, elle te tuera*, *op. cit.*, p. 610.